休刊にあたって

放送大学名誉教授　柏倉康夫

『情報化社会・メディア研究』は、今回の第 17 巻をもってひとまず休刊することになった。第 1 巻を出したのは平成 16 年（2004 年）で、「創刊の辞」として次のように書いた。

> 放送大学は、平成 14 年度に大学院修士課程の第 1 回入学者 500 余名を迎え入れた。それから 2 年、私が主宰するゼミナール「情報化社会研究」に所属した人たちは、修士論文を書き上げて修士号を得た。事実経過は以上のようなものだが、この 2 年間の努力は並大抵のことではなかった。
>
> 放送大学修士課程の学生の多くは、職場の第一線で活動する社会人である。いきおい研究と論文執筆は、仕事から戻った深夜かウィークエンドに限られる。この少ない時間のなかで、みなは新しい資料を発掘するためにフィールドワークを行い、資料を蒐集し、新しい知見を得るべく思索を重ねたのである。その成果がここに収録した 9 篇の論文に結実した。

創刊号以後、本誌は毎年 1 回刊行されて今回で 17 回を迎えた。この間、前 16 号までに掲載されたものは、論文、研究ノート、特別寄稿など 147 にのぼる。論文は掲載前に厳しい査読があり、掲載された論文のレベルは高く、それぞれの分野の後続で引用されることも少なくない。本誌『情報化社会・メディア研究』に掲載された論考はすべて、リポジトリ（http://ua-mis.mints.ne.jp/repository/）でお読みいただくことができる。

このうち特別寄稿の半数は、その後他大学の博士後期課程に進学し、博士論文として提出し合格したものの要約である。著者のたゆまぬ努力の成果にほかならないが、本誌がそのスタートの場を提供できたことを喜びたい。

もう一つ成果を紹介すれば、第 9 巻（2013 年 3 月刊）に、「特集」として「原発事故を米軍”準機関紙”はどう伝えたか　Stars and Stripes 紙の報道から」を掲載したことである。

これは 8 名の会員による共同研究で、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災と、それによる東京電力福島第 1 原子力発電所の事故とその影響を、在日アメリカ軍を主な読者とする日刊紙 Stars and Stripes がどう報じたかを調査したものである。調査対象は事故直後の 2011 年 3 月 12 日から 6 月 1 日にいたる記事 76 本で、それらの分析から、アメリカ側は原発事故で炉心溶融（メルトダウン）が起きたと一早く断定し、家族に帰国を促し、そのためのチャーター便を用意し、基地内の全員にヨウ素剤を配るなど、事態を「有事」と捉えていた実態が明らかになった。こうした対応は、政府発表に基づくマスメディアの情報が頼りだった私たちの認識とは異なるもので、深刻な情報ギャップがあったことが明らかに

なった。

Stars and Stripes を対象とした論考は他になく、原発事故に対する日米の情報の差異を明らかにした点で大いに注目された。ぜひ上記のリポジトリから本文を読んでいただきたい。

創刊から 17 年間、休まずに刊行してきた本誌の置かれた情況にも変化があった。私が 2009 年に放送大学を退き、それに伴って「情報化社会研究」の講座がなくなってからは、論文執筆の中心であったゼミの修士修了生がいなくなったこと、そして研究を続けている人たちの多くは専門分野の学会に所属して、他の学術誌に投稿する機会が増えたことなどである。こうした事情を勘案した結果、この第 17 巻をもって当雑誌を休刊とすることにした次第である。長年編集に携わってきた各位に、執筆者一同に代ってお礼を申しあげる。

なお本誌の母体である「情報化社会研究会」は今後も存続する。そして掲載すべき論考が多数寄せられる情況となれば、当誌の復刊もありうるのではなかろうか。

2021 年 6 月 1 日